



地域の底力

都市生活も のどかな暮らしも 幸せを選べる 千葉県館山市

房総半島の先端に位置する、
海に囲まれた館山市には、
のどかな田舎と都市機能の、
双方を併せ持つ、
懐深い魅力があった。



取材・文山内史子
写真 野瀬勝一

2010年に完成した約400メートルの「館山夕日栈橋」は、栈橋形式としては日本で最も長い構造。写真の帆船「日本丸」のような官公庁船や、「にっぽん丸」をはじめとする大型客船が寄港する際には、その美しい景観がいつそう引き立つ。(館山航空隊撮影)

都市圏の田舎 選択肢のある移住

人口約四万八〇〇〇人の千葉県館山市は、房総半島の先端、東京湾の入口に位置する。戦国時代から江戸時代初期にかけては、里見家が治めていた安房国。滝沢馬琴による『南総里見八犬伝』の舞台であり、再建された館山城が今も街を見守るように建つ。

千葉県内では、東京からもっとも離れた地域。地図上、湾岸をく



るりたどると、ずいぶん距離があるようにも思える。しかしながら、東京湾アクアラインを利用すれば、都心から車で約八〇分という近さ。現在、その利便性を活かし、官民手を組んだ移住への対応が行われている。

まずお話を伺ったのは、NPO法人「おせっ会」の代表、八代健正氏だ。二〇〇七年の設立以来、相談の窓口となり、約一五〇世帯の移住をサポートしてきた。

発足当時は、田舎暮らしの第二次ブームが到来していた頃。団塊の世代の大量退職も見込まれていた。未来の人口減少をふまえての立ち上げだったが、正直なところ、



1982年に再建された館山城は、「南総里見八犬伝」の博物館として版本や錦絵などが展示されている。周辺の城山公園は、桜や紅葉の名所。散策を楽しむ市民も多い。

館山市経済観光部商工観光課担当課長・亀井徹氏（左）と、移住の相談窓口であるNPO法人「おせっ会」代表・八代健正氏（右）。官民が協力して、移住対策に取り組んでいる。



距離を考えれば、館山はさほど田舎というわけではない。そうあらためて認識したことで、方向転換へと至ったそうだ。

「都市とつながっていたい、あるいは田舎のよさを味わいたい。価値観や幸福度の選

択肢を考えたとときに、双方の切り口を用意できるのが館山の一番の売りだろうと、今は思っています」

「おせっ会」誕生と同時期、行政サイドでも移住・定住担当の部署を設置。試行錯誤を重ねつつも、

恵みをもたらす海は、釣り人にも人気。年間平均気温は一六度という温暖な気候で、一月早々からポピーをはじめいろいろな花々が景色を彩る。駅前から少々車を走らせれば、のどかな農村風景も広がり、いちご狩りを体験できる施設も。

実際、その魅力に惹かれた移住者は少なくなかったが、都心との



1999年完成のJR館山駅は、温暖な気候を象徴するような南欧風のデザイン。ロータリーには花壇が設けられ、一年を通して写真のポピーほか花々が観光客を迎える。

上／釣り人で賑わう週末の「館山夕日桟橋」。
下／外海に面した海岸でのサーフィン、穏やかな館山湾でのヨット、ウインドサーフィン、ダイビングなど、多様なマリンスポーツを楽しめるのが館山の魅力のひとつ。



に物語っていたのが面白い。

出勤前、海でひとときパドリングを楽しんできた八代氏は、誰が置いたかわからない山菜やみかんなどを、玄関先で見つけることが多々あるという。いわゆる、昔ながらのお裾分け文化が残っているのだろう。対して亀井氏は都会のご近所付き合いと同程度だという。

「館山に住みつつ、私の場合は農業とは無縁に暮らしてきました。田植えや稲刈りだといって田んぼに入ったことすらありません。幼い頃は近くの海岸で泳ぎましたが、ほかは普通の東京の暮らしとほぼ変わらないでしょう。館山は、都内への通勤通学や二地域居住も可能だと思います」

お子さんが東京の大学まで東京湾アクアラインを走る高速バスを利用して通う、亀井氏の言葉だけに実感がこもる。

興味深かったのは、「おせっかい」を介した移住者の年齢層だ。問い合わせを含め、相談のほとんどは若い世代だという。

「昨年度も、七五%が四〇代以下でした。当初は印刷物にかける予算がなく、インターネットを中心

に展開したのが大きかったのかもしれません。逆に、退職者の方たちは、自分で道を切り拓くことが多いんですね」

サポートが必要なのは、子育てから、仕事、家、地域とのつながりまで手探りで進まなくてはならない世代。まさしく、おせっかいを必要としているのだ。

おせっかい。都会では失われつつある人間関係はその後、館山の随所で感じることとなる。

移住したのは、館山だからこそ

楽しみのある生活と、二地域居住。亀井氏が話していた「館山ならではの暮らし」を目の当たりに



東京から移住し、パッションフルーツの栽培に特化した「RYO'S FARM」を立ち上げた梁寛樹氏。実が熟すと、緑色から紫色へと変わる。温暖な気候とハウス栽培により、1年に2回収穫できるのが館山の特徴だという。



したのは、東京から移住し、パッションフルーツの栽培を手がける梁寛樹氏の「RYO'S FARM」だった。サラリーマン生活を経た後、梁氏は二六歳で館山での生活を始めた。

「もともと、サーフィンをやりたが館山には来ていたんです。次第に田舎で農業をやりたいという気持ちが生えるなか、サーフィンと両立できることと、東京から車で二時間かからない近さが移住の決め手になりました」

まったくノウハウがないなかでのスタートだったが、「地域おこし協力

隊」制度にエントリーし、市の力添えを得て、地元の農家で研修を積んだ。

「若い男ひとりの生活ですから、近所の方たちがおかずを分けてくれたり、寝込んだときにはおじやをつくってくれたり。館山は、人が温かいですね」

そう、梁氏は家族を東京に残して一念発起したのだが、その東京とは公私ともに、今も日常的につながっている。

「家族だけではなく、週末には友達が頻繁に訪ねて来るんですよ。農作業の合間に海に行く毎日、みんなうらやましがります」

東京都内のマルシェ（青空市場）やイベントなどを利用し、販売は自力で。その地道な活動が実り、酸味だけではなく甘みをふくんだ「RYOS FARM」のパッションフルーツはファンを増やしつつある。

最初は慣れないことばかり。決して順風満帆だったわけではないが、常にサーフィンという支えが心にはあった。

「農家の息子でもなく、資金も経

館山の海に心惹かれて移住した、NPO法人「たてやま・海辺の鑑定団」代表、竹内聖一氏。手にしているのは、海岸で見つかったウミガメの頭蓋骨と椰子の実。自然の宝庫、沖ノ島をバックに。



沖ノ島はかつて文字通り島だったが、1923年に起きた関東大地震による隆起を発端とし、ほどなく陸続きとなった。砂浜は夏場、海水浴場として賑わう。



上／海岸では、さまざまな貝殻をはじめ漂着物を拾う「ビーチコミング」も楽しめる。下／沖ノ島の森には、タブノキなどの照葉樹やハマゴウなどの海浜植物が生い茂る。



験もない。自分のような人間が農業でやっていけたら、社会的なインパクトを与えられるのではない

かと思いますが、とくに一年目は大変でした。サーフィンがなければ、挫折していたかもしれませ

二〇〇四年に設立したNPO法人「たてやま・海辺の鑑定団」代表、竹内聖一氏もまた、館山の海に魅せられて東京から移住したひとりだ。

館山市の海岸線は、三四・三キロメートル。その半分は太平洋に、もう半分は「鏡ヶ浦」と呼ばれる

ほど波が穏やかな館山湾に面している。

「砂浜から岩場まで変化に富んでいるこの辺の海はとても魅力的で、多様な海岸動植物が生息している。あまり知られていませんが、サンゴの北限域でもあるんです。移住した当時、僕は完璧なよそ者目線だったので、春、田んぼにオタマジャクシがいるだけでもおもしろいと思うわけです。でも、地元の人には当たり前過ぎて、わからないんですよ」

その象徴が、陸続きで渡れる沖

ノ島。全周一キロメートルほどの小さな島には海岸動物に加え、縄文時代の遺跡や照葉樹林など、貴重な自然が残るが、かつては、あまり知られていなかった。ひと気の無い危険な場所だと思われ、地元の子供たちはかえって近寄らないようにしていたそう。

目の前に広がる海は地域の宝箱

沖ノ島探検やシユノーケリング、釣り体験など、竹内氏は館山の海をベースに自然体験ができるエコ

右／館山市経済観光部プロモーションみなと課課長・石井博臣氏。後ろは「渚の駅”たてやま」の「機場の水槽」。館山湾や海辺の生物を観察できる、子供たちに人気の場所。下／館山湾に建設された「館山夕日栈橋」。その名が示すように、美しい夕景が望める。晴れた日には、海の向こうを富士山が彩る。



ツーリズムを展開。都心近郊でありながら地の利を活かした活動が評価され、二〇〇六年度には日本エコツーリズム協会の「第二回エコツーリズム大賞特別賞」を受賞している。

海とふれあうツアーは人気を集めているが、今後はいかに地域の素晴らしさを地元を広めていくかがひとつの課題だとか。

「僕らが教えているのは、圧倒的によその子供が多い。地元の子供たちに、地域のことをもつと知ってもらおう活動がこれからの地域のために重要なんです。ただ、最近では、沖ノ島の楽しさや大切さを語る声が地元からも聞こえるようになっていきます」

竹内氏の表情がほころんだ。

もう一つ、館山の人々が地元を海を再認識するできごとがあった。二〇一〇年、約四〇〇メートルという、栈橋形式としては日本一の長さを誇る、「館山夕日栈橋」の完成だ。

館山市経済観光部プロモーションみなと課の課長石井博臣氏によれば、特定地域振興重要港湾に館山が選定されたことが、大きな転機になったという。

「館山港港湾振興ビジョンを国と県と市の共同でつくり、そこからハードの整備が始まりました」

栈橋は、大型の船舶が着けられるマイナス七・五メートルの水深を

持つ岸壁を有する。結果、「にっぽらん丸」や「ばしふいっくびいなす」など大型客船が館山に寄港するようになった。

「寄港時にはセレモニーやお祭りのおはやりで出迎えるなど、市民ぐるみのおもてなしで歓迎していきます」

毎年八月に開催される「館山湾花火大会」は、クルーズの目玉。オプションツアーで、市内の観光地を散策する客も少なくない。

帆船「日本丸」や自衛隊艦船といった官公庁船も寄港し、船内見学を楽しむ機会も増えた。

「栈橋が道路から見えるので、船が着くと、皆さん興味津々で来ら



「渚の博物館」ほか、特産物を販売する「海のマルシェたてやま!!」や飲食店がある「渚の駅”たてやま」。館山湾に面したスペースにはウッドデッキが設けられ、景色を満喫できる。

れる。全国的には一般の人が入れなかつたり、停泊する船が見えなかつたりという港も多いなか、どなたでも入ることができ、船を間近でご覧いただけるのが館山ならではの特徴だと思っています」

二〇一二年には、栈橋を眺められる「展望デッキ」や「渚の博物館」、館山の海を再現した「海辺の広場」



「館山夕日栈橋」に大型客船「ばしふいっくびいなす」が寄港した際の様子。オプションツアーで乗船客が市内を散策するという、あらたな経済効果も生まれた。



毎年、館山湾鏡ヶ浦で開催される寒中水泳に参加するという、市長の金丸謙一氏。抱えているのは、市のマスコットキャラクター「ダッペエ」。房総の方言「～だっぺ！」が名前の由来。館山市民同様におおらかな性格とのこと。

などがある「渚の駅」たてやま」も誕生。昨年には地元産品の販売所とレストランも完成し、週末は、観光客だけではなく、地元の家族連れやカップルでも賑わう。

「館山の人のとって、海は生まれたときからずっとあるもの。改めて地域資源を見直すのはなかなか難しいものですが、棧橋のおかげで市民の皆さんが目に向けてくれるようになりました」

「館山夕日棧橋」の西、館山湾の向こうには、富士山が望める。この景色もまた、館山の人にとってはあたりまえの眺めだが、都内から見るとはるかに存在感があり、見惚れてしまう。

出生率上昇につながった 頼れる子育て環境

夕日が彩る美しい富士山をとらえた写真を披露しつつ、館山の魅力をあらためて語ってくれたのは、市長の金丸謙一氏。なかでも関心が高まったのは、ここ数年、わずかではあるが、出生率が増えている状況だ。

「直近五年間のうちの四年間で、県下一位なんです。高齢者を支える若い人たちに館山に移住してもらいたい。子供を増やしていただきたい。それには、子育て環境を充実しなければなりません」

その一端を担うのが、「元気な広場」だという。ゼロ歳～六歳までの未就学児が保護者とともに利用できる屋内の育児施設。同様の施設は他の自治体でも見られるが、まさしく「広場」のような広い空間が館山の自慢だ。

訪れてみたところ、子供たちが思い切り駆け回れるほどの余裕がある。また、保護者は若い世代に限らず、祖父母が同行する姿も見られた。

「一番喜ぶのは子供たちかなと

遊具が揃う広々とした「元気な広場」では、それぞれに楽しみを見つけて過ごす子供たちの姿が見られた。保護者のための子育ての講座や育児相談日も設けられている。



思ったら、さにあらず。お母さん方でした。子育てを本で学んでも、実践はなかなか難しい。「元気な広場」では母親同士が話せるだけではなく、高齢者から子育ての経験を聞くこともできるんです」

隣接するコミュニティセンターには、保健師がいる健康課があるため、専門家にも頼れるそう。

心細いときには、誰かに相談できる場所がある。金丸市長の話は、「おせっかい」と重なるものがあった。頼る、頼らないはそれぞれの自由に任せた、程よいおせっかい。田

舎と都市圏。館山の持つ二面性のちよど間に、「元気な広場」が位置しているようにも思えた。

さらには、コミュニティとして小学校の存在をも大切に考えていると金丸市長は語る。

「基本的に、統廃合はしない。したくない。小学校は地域のシンボルであり、その土地を思うノスタルジーにもつながる。子供が少なくなつたから統合するのではなく、そうならない仕組みや子育ての環境をつくりましょうと。現実には難しい場合でも、その気持ちが常に私の根底にあります」

力強い口調が、心に響く。選択



館山湾の向こうに富士山を眺められる景色もまた、館山の宝のひとつ。5月中旬、7月下旬は、夕日がちょうど富士山頂にかかる「ダイヤモンド富士」と出会うことも。



「房総フラワーライン」は房総半島最南端の海岸沿い約6キロのルート。春の菜の花をはじめ四季折々、花で彩られる景色が続き、「日本の道100選」に選ばれた。

を迫られたとき、行政の長に熱い思いがあるか否かは大きい。

「少子化は今に始まったことではありません。これをやったら全てもよくなる、一発ホームランの対策はない。原因を根本から減らし、五年後、一〇年後に結果が徐々にあらわれていく。そんな地味な積み上げが大事だと思っています」
高齡者対策も、コミュニティに根付いている。

「サークル活動やボランティア活動、まちづくり活動など、高齡者の皆さんが主体になってください、どんどん働いてくださいと言っています」

そう金丸市長は話すが、現役から離ればおのずと、外に出る機会が少なくなるのではないか。率直に聞くと、笑顔が返ってきた。

「おかげさまで、館山には地域のコミュニティがまだ残っているんです。一〇の公民館に加えて各地域に集会所があり、公民館長を要に組織化されています。その中で表に出ようと、声かけ運動をしてもらっているんです」

おせっかい。古き佳き言葉が、再び胸に浮かぶ。館山の二面性でいうと、田舎であることが功を奏しているのだろう。人気の高いダンスサークルをはじめ、積極的に参加する人は多いという。

**あばらが足りない
おおらかな人の気質**

もともと印象深かったのは、館山の人の気質だ。

「あばらが一本足りない」とよく言われるんです。温暖な気候で、人はおおらかに育つ。海も山も恵みが豊富だから、細かいことを気にしない」と

生活が厳しくない分、辛抱心がない、我慢が足りないなど、ときにはネガティブにも解釈されるが、金丸市長によると、あばらの由来は江戸時代に遡るそうだ。
「館山から新鮮な魚介類を江戸ま

で運ぶ際、なるべく船の先端を細くして抵抗を少なくし、あばらと呼ばれる肋骨にあたる部分を抜いていったんですよ」

あばらを抜くと強度は弱まる上、バランスを取るのが難しくなるが、船のスピードは上がる。

「江戸の食生活を担っていたんですね。里見水軍の流れをくむ操縦技術があったからなんですよ」

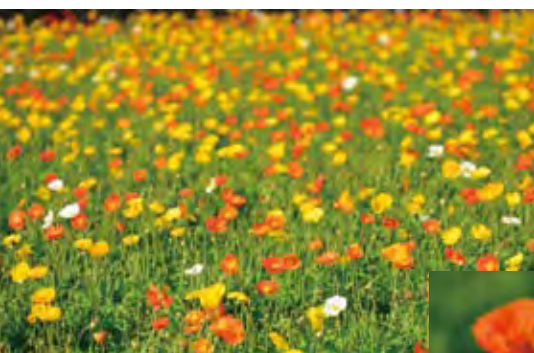
東京湾をまっすぐに進んで江戸を目指す、勇壮な漁師の姿が脳裏をよぎる。

と同時に、館山の人は柔軟性がありつつも、いったん決まったらがんがん直進するという、八代氏の話も思い出された。これまで聞いてきた館山市の様子は、「あばら

が一本足りない」気質があつてこそだと、微笑ましく思う。

八代氏は、「まあいいっぺよ」というのが、このあたりの人の口ぐせだとも。方言の軽やかな響きとも相まったのか、ふっと肩の力が抜けた。白黒はつきりした態度が問われがちな時代において、じんわりやさしくしみる言葉だ。

自分の意志で動ける都市であり、温もりを覚えるおせっかいが残る田舎であり。幸せの選択肢が許される暮らしは、海のごとき深く広い館山の人の心の象徴のような気がした。



春の桜やツツジ、夏のハマヒルガオ、秋のコスモス、冬に咲き始めるポピーやストックと、館山市はいたるところでほぼ一年中、花を愛でられる「花の王国」だ。